

最優秀賞『破船』

高橋 綾香

「お船様が来た。」その一言で村じゅうが沸く。お船様は難破した船のことだ。なぜそのような破船に人々が喜ぶのか。それは船に多くの積荷があり、その中には米俵といった食料が多くあるからだ。必ずしもあるわけではない。しかし日々飢えと隣りあわせの生活をしている村人にとってみれば、船に食料があれば神が訪れたも同然なのだ。これは、そのお船様によって村が崩壊してしまう話だ。

主人公の伊作は母と弟、妹と暮らしている。伊作の父は自ら身を売り、年季奉公へ出されている。貧しいがあまり、身売ることがあたりまえとなってしまうのだ。毎日伊作と母は海へ行き貝や魚をとる。それらを全てその日に食べず、干物にして隣村へ売りに行くこともある。売ってできたお金で豆を買い食べることもある。しかし何も食べられない日がないわけではない。これは伊作の家だけでなく、この村の人たちは皆このような生活なのだ。だからこそお船様がとても大切な存在で、お船様の到来を待っている。

ある冬、お船様がやって来た。「お船様が来た。」この一言で村人は集まる。このお船様には多くの米俵、酒があった。村人はとても喜んだ。そしてそれらは村人に分け与えられた。すると人々は飢えから逃れようとどんどん食べ、飲んでいく。家によってはすぐになくなり、再び飢えと隣りあわせの生活にもどっていった。そして人々は再びお船様が訪れることを期待しはじめるのであった。時が過ぎ翌年の冬、お船様が再びやって来た。またあの一言で村人は集まる。しかしこのお船様には食料はなかった。そのかわりに、赤い服を着た吹き出物まみれの死体がたくさんあった。村人は赤い服がとてもめでたいものだと思いととても欲しがった。そしてその服が分け与えられた数日後、村に異変が起こりはじめた。高熱、頭痛で苦しむ人があらわれはじめ、どんどん増えていった。さらに、顔全体をうめつくすような吹き出物。村は混乱しはじめる。死者も出はじめたが、薬もなく原因もわからず対処できない。どんどん広がる中、その病が「もがさ」と知ると知る。さらに、お船様と思っていた船が、病んだ人を村から追い出す船だと気づいた。お船様を信じすぎたために、このような村中感染をまねいてしまった。もがさが落ちついてきたころ、感染

者は山追いするよう命じられる。山追いは山中へ入ること、つまり飢死を意味する。伊作の家では伊作以外の全員感染した。伊作と家族の別れ、それは永遠の別れであり、伊作は放心するのだった。

この本を読み終えて感じたこと。悲しい、苦しい、怖いという感情ではなかった。まずは、言葉ではあらわすことができないほど暗く、重い、まるで暗闇を1人でさまよっているような不安だ。次いで暗闇の中に小さな光を見つけた時のようなあたたかみだ。なぜこのような正反対の感情をいだいたのか。それは伊作と家族の別れのシーンが強く印象づいたからだ。今までどれだけ辛かろうと飢えと一緒にのりこえてきた家族。これは伊作の中でとてもはかりしれないほど大きな存在であることに違いない。自分が家族と別れないといけない、さらに自分は一人になると思うと今後どうしたらいいのか、生きていけるだろうかという大きな不安につつまれる。これがきっと私の感じた不安だ。しかし伊作と別れるシーンで母は、「泣くな。」と悲しい表情もみせず、むしろ笑っていたという。ここで母が泣いてしまうと伊作が余計に悲しんでしまうからという母のやさしさなのだろう。さいごに母のやさしさを感じるとともに、家族のあたたかみを感じた。これが私の感じたあたたかみだろう。

家族との別れ、そして家族のあたたかみが書かれた本は多くある。そしてそれらを私も何度も読んできた。読んだことがあるからこそ言えることだが、もしこの本が他の本と同じように家族との別れや家族のあたたかみが書かれていると思う人がいるのであれば、全くちがうと断言したい。なぜかというと、まず状況が全くちがうからだ。飢えという今の日本人からはなかなか想像もつかない状況で、いつ命を落とすかわからないからこそ、命のおもみがちがうと感じた。さらに、お船様によって崩壊する村、家族。一緒に苦しみと戦ってきた村の人々、家族との別れ、さらにその別れは永遠の別れ。とても想像できるものではないだろう。このような本を読んだことがあるだろうか。さらに私も感じたような読み終えた後の感情は、今までに感じたことのないようなものであり、読んだ人にしかわからないのではないかと思う。だからこそこの本を多くの人に読んでほしいと思う。